

人—サケ—環境の揺れる網

——北海道浦幌町厚内におけるサケ漁を取り巻く応答的關係

藪田希紅

キーワード：気候変動、サケ、不漁、応答、網

要旨

本研究は北海道十勝郡浦幌町厚内においてサケ漁をめぐる営みを記述し、人—サケ—環境の關係と、その変容を描き出すことを目的にしている。長期的な気候変動による不漁を背景としつつ、季節的リズムを通じて地域に埋め込まれた複数の実践を追うことで、サケ—人間の關係についての研究に新たな視座を提示する。ここから立ち上がる關係性は、關係が絶えず繕い直されつつ共に揺れる応答の網として理解できる。

第1章では、本研究の背景と目的について説明する。

第2章では、北海道におけるサケの増殖事業について説明し、サケと人の關係についての環境人文学的研究をレビューする。また、本研究の分析枠組みとなるアナ・チンのアプローチや、ティム・インゴルドの「応答」概念を提示する。

第3章では、調査概要を説明する。はじめに、事前調査の結果として調査地域とサケの前提知識をまとめる。調査地域におけるサケ漁とサケの増殖事業について説明する。また、参与観察や聞き取り調査に協力いただいた主な団体と、調査方法の説明を簡潔に行う。

第4章以降では、厚内におけるサケとの関わり合いを季節的なサケの移動に沿って記述しつつ、どのような応答が生まれているのかを考察する。

まず、第4章では調査地域におけるサケの人工孵化放流の変遷とそれにまつわる語りをまとめる。放流の方法・主体・場所は歴史的に変化してきており、厚内の人々はサケの回帰をめぐる工夫と試行錯誤を続けてきた。

第5章では、回帰した沿岸のサケを獲る定置網漁について、その準備からサケの利用までを追う。網づくり、サケの選別、サケの加工などの実践には人間・道具・サケだけでない多様な海の生き物・海流などとの応答的關係の中で培われた熟練の身体知や環境変化への感受が存在している。

第6章では、聞き取りから見えてきた昔の漁の様子をまとめる。年配漁師の語りは、漁の機械化が単なる合理化だけではなく、人・サケ・海・道具などの關係性を書き換えるプロセスとして厚内に現れてきたことを示している。

第7章では、川に遡上するサケをめぐる人々の想いを描き出す。近年、遡上する親魚の確保のため定置網漁の規制が強められている。一方で、川を上るサケを獲る刺し網漁は、アイヌ民族の文化継承にとって重要である。また、災害により更に緊

張が高まる中で、厚内川のサケに対する人々の想いが表面化した。サケの遡上を待つという行為は、サケと文通しているような応答関係であり、それを基礎とする「責任」が生じていると論じる。

第8章では以上で提示された多様な場面において多層的な応答が生じており、それらに変容している様子を「応答の網」として理論化し結論に代える。最後に本研究の成果と課題を述べる。

このような人とサケ、環境などの関係が絶えず繕い直される応答の網の民族誌を描くことにより、人間活動がもたらした気候変動=衰退という単線的な理解から、多種がそれぞれの時間軸で作り変える環境への想像力を開く一助になると考える。